

IMF 秋季世界経済見通しから

国際通貨基金(IMF)は、毎年4月と9月に世界経済見通し(WEO)を発表しているが、9月20日に2011、12年の改定見通し発表があったので、概要を紹介する。

1. 世界経済見通し「新たな危機的段階」

IMFは、前回4月のWEOの予測と比較し、年初より先進国の成長が鈍化していること、8月以降財政と金融の不確実性が増加していることを挙げ、経済の回復が著しく不透明なものになっていると見ており、2011年の世界経済成長率見通しを4.0%、2012年を4.0%とともに下方修正している。

下振れリスクとしては、①日本の東日本大震災の被害、②一部の石油産出国での動乱の拡大、③米国経済の公的需要から民間需要への移行の行き詰まり、④ユーロ圏の金融の混乱を受けての世界市場でのリスク資産の投げ売りなどを挙げており、世界の経済活動が弱まり、成長にばらつきが出てくると見ている。

ただし、今回の見通しでは、EUがユーロ周縁国の債務問題を押さえ込み、米国が経済活動の支援と中期的財政再建とのバランスの取れた政策運営を行うことを前提としており、万一どちらかに問題が生じれば、世界経済の成長に大きな影響を与え、景気後退局面に逆戻りする可能性もあることを指摘している。

2. 先進国経済

先進国の成長率見通しは、2011年を1.6%、2012年を1.9%とし、6月の改定予測からそれぞれ0.6ポイント、0.7ポイントの下方修正となっている。中でも米国は、2011年を1.5%、2012年を1.8%と、それぞれ1.0ポイント、0.9ポイントと下げている。

一方、ユーロ圏の成長率は、一部の国の債務問題などの情勢が、一段と不透明感を増しているとし、2011年を1.6%、2012年を1.1%とし、それぞれ0.4ポイント、0.6ポイント下げている。国別では、ド

イツが2011年を2.7%、2012年を1.3%、フランスが2011年を1.7%、2012年を1.4%、スペインが2011年を0.8%、2012年を1.1%と予測。また、英国が2011年を1.1%、2012年を1.6%と予測している。

日本については、東日本大震災からの復興と開発に対応するとともに、高い水準にある公的債務に対処する必要があると指摘している。日本の成長率は、2010年が4.0%であったが、2011年は大震災の影響により▲0.5%と急激に落ち込むものの、2012年は大震災からの落ち込みから脱し、復興需要などを考慮して2.3%と予測している。

表 IMFの世界経済見通し(実質成長率、%)

	2011年	2012年
世界	4.0 (▲0.3)	4.0 (▲0.5)
先進国	1.6 (▲0.6)	1.9 (▲0.7)
米国	1.5 (▲1.0)	1.8 (▲0.9)
ユーロ圏	1.6 (▲0.4)	1.1 (▲0.6)
ドイツ	2.7 (▲0.5)	1.3 (▲0.7)
フランス	1.7 (▲0.4)	1.4 (▲0.5)
スペイン	0.8 (0.0)	1.1 (▲0.5)
英国	1.1 (▲0.4)	1.6 (▲0.7)
日本	▲0.5 (0.2)	2.3 (▲0.6)
新興市場国・途上国	6.4 (▲0.2)	6.1 (▲0.3)
ブラジル	3.8 (▲0.3)	3.6 (0.0)
ロシア	4.3 (▲0.5)	4.1 (▲0.4)
インド	7.8 (▲0.4)	7.5 (▲0.3)
中国	9.5 (▲0.1)	9.0 (▲0.5)

出所:IMF

注)かっこ内は2011年6月予測からの修正幅。

▲はマイナス。

3. 新興市場国および途上国

新興市場国および途上国の成長率は、2011年を6.4%、2012年を6.1%と、それぞれ0.2ポイント、0.3ポイント引き下げ、先進国の需要減などにより不透明感を増しているものの、依然として力強い成長を続けると見ている。

主要な新興国のブラジル、ロシア、インド、中国(BRICs)をみると、ブラジルは2011年を3.8%、2012年を3.6%、ロシアは2011年を4.3%、2012年を4.1%と、引き下げている。インドは2011年を7.8%、2012年を7.5%、中国は2011年を9.5%、2012年を9.0%と下方修正をしている。

(調査グループ 関谷裕介)